夕陽会旗を前に力強くエールを送る
（H27.2.20）

発行所
夕陽会 函館市支部
函館市立鍛神小学校
印刷／㈱島本印刷

雑感

夕陽会函館市支部　副支部長　加賀重仁
（昭和62年卒）

函館山を眺めながら、自分がこの街に育てられたこと、そして、これほどまでにこの街が好きなのだということを恥ずかしげもなく思うことがある。とりわけ、函館山の麓で生まれ育った自分は、「ここを離れられないんですよね。」と度々会話の中で話していることに気付く。

立場上、新任の先生方に挨拶をすることがあるが、必ずあの実行寺の「とっちんさん」のエピソードを話すことにしている。何より函館で教師として勤める以上、この街のことに関心をもち、好きになることは、市立学校教員としての大前提と考えるからである。

当時の函館は、ロシアをはじめ、多くの外国人を受け入れていたが、中でも仏教にとって聖なる場である寺がその境内に異なる宗教の仮聖堂（今のハリストス聖教会）を置く許可まで与えていたという事実、そして、その場所から実行寺の読経とハリストス正教会の聖歌が同時に聞こえる様を想像したとき、函館人の寛容さ、懐の深さ、好奇心の旺盛さを感じるのである。まさに進取の精神である。

どんな宗教も、やすらぎを与え、正しい人の道を示唆してくれるものなのであろうと思うのであるが（私は無宗教であるが）、そのことが混沌とした世界情勢の一因になっていることは、とりわけ函館人を自称する私としては心が痛む。

私事であるが、長女が金沢市におり、帰省の度に、金沢市民が「金沢」を愛し、そのことに圧倒されるのだと聞かされる。音楽堂にコンサートを聴きに行っても、市場に魚や野菜を買いに行っても、近所のスーパーに行っても、ジンジンと感じるそうである。果ては、ローカルテレビ局で一日中地元の歴史や風土を取り上げた番組が放送されているそうだ。

奇しくも、新幹線が一年違いであるが開業を迎え、互いの街は大いに盛り上がっていると思うのであるが、娘曰く「金沢は必死感がすごい！」そうだ。そんな話を聞くにつけ、ふ～んと思いながらも、何か心の中に対抗心がわき上がってくるのである。

函館校に「地域国際学科」が設置され、小学校教員を計画的に養成する教職課程が復活したことは、夕陽会、本学の並々ならぬ努力が結実したものである。私の立場で言えば、これから函館の学校現場にやってくるであろう後輩たちが、教育の本質に根ざした函館の教育を体感し、教員としての揺るぎない資質や実践力を身に付け、生涯にわたって充実した教職人生を送ることができるよう、この街の教育をより一層発展させること、何より「夢とロマン」（最近使われなくなりましたね）をもって取り組むこと、それが私の役割であり、それが母校への恩返しと考えている。

時の流れ

夕陽会函館市支部 顧問　碇　幸信（昭和四十九年卒）

『桐の花　紫におい　けだかしや　教えの道に・・・』私の母校である桐花中学校の校歌である。不思議に、年を重ねても記憶のどこかに残っているものである。二十八年度より、三校が統合され『五稜郭』を校名とする新たな中学校が誕生する。つまり、母校の名が消える。一抹の寂しさは禁じ得ない。しかし、激減する児童・生徒数という《時の流れ》を考えれば何らかの施策を講ずるのは当然である。一定の方針に従い、デメリットを軽減する手立てをしっかり取りつつ、市内全域の再編を一日でも速く達成していただきたい。そして、統合のメリットを十分生かし、函館の子どもたちの『学び・心・体』の成長を結果として示していただくことを心より願っている。

少々不安なのが、『函館　転出超過全国十位』という新聞の見出しである。二十六年度は、約千人の転出超過という報である。看過できない数字である。小学校を含め、全ての再編計画が終了した時点で、再々編案が浮上するような事態だけは避けなければならない。函館市の最大の課題は、人口減のような気がする。函館市、各種団体・組織、函館市民一人一人が危機意識を持って取り組む必要がある。歯止めをかけるには『オール函館』が必要条件である。夕陽会函館市支部として何かお手伝いできることは？。新たな『地域貢献』は？、よりステップアップした『地域貢献』が可能なのでは？。また、暇な年寄りの戯れ言が始まった。最悪のパターンに陥る前にこの件については終止符を打つことにする。だが、少子化・人口減は、将来的に大学の存続にかかわる問題かもしれない。

最後に、感謝の気持ちを載せ結びとしたい。

三島支部長・高間幹事長及び鍛神小学校全教職員の皆様、二年間にわたる夕陽会函館市支部事務局の業務を遂行していただき心より感謝申し上げます。

この会報が、届く頃には二月の受賞祝賀会も無事終了し、四月の総会を残すのみという時期かと思います。

私が、支部長を退任して以降、青木・三島両支部長には、『地域貢献』『組織拡大』という大きな目標に向かい積極的且つ継続的に実践していただきました。至難の課題を快く引き受けていただき衷心よりお礼申し上げます。また、在任中、橋田会長はじめ、本部事務局には多大なるご支援を賜りました。私にとってもひとつの区切りであり、《時の流れ》を感じます。今後は、四月に選任される若き支部長を中心に新鮮で実効性のある方策が生まれることを期待しております。

受賞者ご芳名一覧（敬称略・順不同）

紺綬褒章	鈴木秀明	（昭和46年卒）
瑞宝小綬章	辻　信哉	（昭和32年卒）
瑞宝双光章	信賀政勝	（昭和22年卒）
瑞宝双光章	古館邦夫	（昭和22年卒）
瑞宝双光章	阿部睦雄	（昭和23年卒）
瑞宝双光章	伊藤正夫	（昭和35年卒）
北海道教育功績者表彰	高橋　登	（昭和53年卒）
函館市文化賞	小笠原愈	（昭和35年卒）
函館市文化団体協議会青麒章	北濱　豊（希石）	（昭和35年卒）

函館市立学校教職員表彰

青木昌史	（昭和53年卒）	鈴木利治	（昭和51年卒）
五十嵐和幸	（昭和52年卒）	田邉信之	（昭和51年卒）
笠井雅秋	（昭和53年卒）	千田重幸	（昭和53年卒）
黒丸譲二	（昭和51年卒）	冨樫廣幸	（昭和51年卒）
品田晃宏	（昭和51年卒）	中谷　満	（昭和52年卒）
杉﨑良治	（昭和51年卒）		

受賞おめでとうございます

よろこびの言葉

叙勲の栄に浴して

辻　信哉（昭和三十二年卒）

昨年春、「このたび、あなたは四月二十九日付けをもって　瑞宝小綬章　が授与されることになりました。誠におめでとうございます」という文章が、文部科学大臣から着信しました。図らずも叙勲の栄誉をいただくことになり身に余る光栄と大変感激いたしました。

報道後、早速、三島千春夕陽会函館市支部長様をはじめ夕陽会会長・北海道高等学校長協会会長・各国会議員等々ほか多くの支部会員の方々からも丁寧な祝詞・祝電を頂き心から御礼申し上げます。

昨春五月十三日午前十一時四十分から国立大劇場で勲記・勲章の伝達式が行われ、午後に指定のバスで皇居へ移動し、午後二時五十分から長和殿「春秋の間」において陛下の拝謁が行われました。陛下のお言葉は短く簡明なものでしたが拝謁は緊張と厳粛、加えて言葉では表現できない威厳のあるものでした。

大学を卒業後の初任校は安平小学校、三年後に高等学校に転じ七校に勤務し、函館西高を最後に退職。通算三十八年の教職生活でしたが勤務校が変わると共に、夕陽会も胆振支部・渡島支部・函館市支部・網走連合支部・宗谷支部・石狩支部・再び渡島支部・最後にまた函館市支部と所属を変えて今日にいたって居ります。

いずれの支部においても会員諸氏から心温まるご支援と多方面にわたるご指導を賜り、今日の私を育てて頂きました。会員の皆さまには心より厚く御礼申し上げます。

特に網走連合支部（紋別支部）及び宗谷支部在籍の折には、当時の瀬川直光会長さんが当地までお出でいただき、親しくご指導を頂きましたこと今も懐かしく思い出しております。この様に長きわたってご支援・ご指導を頂きました関係各位のご尽力があっての叙勲と心から感謝いたしております。

不安・戸惑い・感謝

伊藤正夫（昭和三十五年卒）

昨年十二月二十五日。文部科学大臣名の〝瑞宝双光章授与〟の通知が入った。〝ホッ〟とした気持ちだった。倶知安教委から退職後の履歴の問い合わせがあったのが春。九月に受賞者として推薦されている。が、十一月三日の公表まで口外しないように。また、妻の出席についても聞かれていたからである。ところが、省からの通知が入った途端に業者から額縁・記念品のカタログ、国会議員さんの祝電が入ってきた。情報化の時代である。北海道新聞記者の取材も受けた。ともあれ、早速、汽車、ホテルの手配をした。同時に、どんな功績で、という戸惑いが胸に広がってきた。自分なりに精一杯やってきたつもりではいるが…。

十一月十日。空あくまでも澄み渡った日。国立劇場で「秋の叙勲・勲章伝達式」が開催された。生涯に一度のこととの思いで妻と参列した。

十一時四十分開式。国歌斉唱・勲章伝達・祝賀曲奏楽・文部科学副大臣挨拶、受賞者代表挨拶と続き予定通り三十分で開式。式典後、省の職員に受賞者一人ひとりの胸に勲章を飾って戴いた。その後用意されたバスに分乗し皇居に向かった。皇居・豊明殿で天皇陛下との拝謁である。

陛下の優しいお言葉、受賞者代表の答礼の挨拶、その後陛下は、整列している受賞者の間をほほ笑みながら、なにかお言葉をかけながら退席なされました。これまでに経験したことのない緊張・感激で胸が一杯でした。

顧みれば、子ども父母地域住民と作り上げた落合小の雪まつり、公開研で積極的に実践してくれた教職員、校長会の仕事で不在だった学校を見守ってくれた教頭先生、三十五年間の教職の仕事を全うすることができたのはこれらの方々のお陰である。ただ感謝するのみである。

夕陽の絆に感謝して

高橋　登（昭和五十三年卒　函館市立的場中学校長）

この度、平成二十六年度北海道教育功績者表彰受賞の栄に浴し、身に余る光栄に存じますとともに、心からお礼申し上げます。

受賞に際しまして、私の一般職時代の恩師でもあります橋田会長様をはじめ、三島支部長様ならびに同窓の先輩・後輩の皆様方から、ご祝詞や心温まるお祝いの言葉を数多くいただき、心より感謝申し上げます。

今回の受賞は、着任以来、教師として半人前の自分を厳しさの中にも温かく指導を続け、励まし育てて下さった先輩の皆様、何時も悩みを共有し、互いに力を与え合った同僚の先生方、教育委員会をはじめとする各関係機関、地域の方々のご指導やご支援のお陰であると肝に銘じ、重ねて深く感謝申し上げます。

私の教師としてのスタートは、昭和五十三年四月、胆振管内の有珠小学校優健分校でした。当時を振り返ると、右も左も分からない新米教師の自分に、ガリ版の使い方をはじめ学級経営のイロハや、指導のポイント・話し方など、細部にわたり声をかけ教えて下さったのも夕陽の先輩たちでした。そんな先輩たちに何の恩返しもできないままに、二十代後半に、函館に戻ることとなりました。

全国的な荒れる中学校時代、着任校も例外ではありませんでした。生徒指導の厳しさと難しさに真正面から立ち向かい、ひとり一人の子どもたちを大切にする、愛情と温かさに満ちた先輩教師の指導から、感銘と多くの教えを受けました。その経験が、後々の教師としての自らのあり方や、学校経営を推進する際の、私の揺るがぬ信念となりました。

これからも、子どもたちの夢や希望の実現に向けて、精一杯努めていく覚悟です。夕陽会の皆様のご活躍とご多幸を祈念し、感謝とお礼のご挨拶といたします。

「かたつむり」を心に

小笠原　愈（昭和三十五年卒）

この度、函館市長工藤壽樹様から、松尾議会議長様、橋田教育委員長様、山本教育長様等多くの方々のご臨席のもと、平成二十六年度函館市文化賞をいただきました。

私は、平成十年に北海道教育庁職員を定年退職し、二十三年振りに帰函して経た十六年間に多くの貴重な体験をさせていただきました。特に、崇高な野又学園の教育信条、小中高校を訪ねて深めた事例協議会、陥った重い病気の治療をいただいた三つの病院の四名の医師の連携によるチーム的医療、教育経営研究所員の教育経営力向上の熱意、伝統のある盲聾教育後援会、誠実に人材を育てる家庭生活カウンセラー委員会、熱意に満ちた「さいかい」の皆様等々との出会いは、何物にも変えられない体験であり、感謝の気持ちでいっぱいです。

実は、私の心に、五十二年前、函館の小学校に創られた特殊学級の担任時に保護者と相談して創った「かたつむり」の題の詩があります。これは、――かたつむりはのろのろ歩く。だけど、足あとは、くっきりと続いている。それは、しっかり歩いているからだ。――です。三年間、ガリ版刷りの学級通信の巻頭に載せていたもので今も、大切に心に刻んでいるものです。先日、高齢のご婦人から、「先生、受賞よかったね。娘は、のろのろ歩きでしたが、なんとか自立しています。今、かたつむりを思いだしています。…」との電話がありました。五十二年前の詩が、今も当時の保護者の心にも生き続けていることを知り、教育という営みの持つ責任の重さなどに気づき感涙にむせびました。

私は、この受賞をひとつの節目とし、のろのろと、しかし、しっかり、老体ですが歩いて、同窓の方々の意も体し、先に述べました諸体験を大事にし、教育という道を拓いてまいる所存です。ありがとうございます。

刻字の楽しさを知って

北濱　豊（昭和三十五年卒）

この度、函館市文化団体協議会より青麒章を戴き、身に余る光栄と心より感謝申し上げます。これという実績や功績もなくただ驚きと戸惑いを感じておりますのに、夕陽会支部はじめ皆様方から心温まる言葉や励ましを戴きました。心から厚くお礼申し上げます。

このような価値ある重い「章」は、私ひとりの努力だけで得られるはずもなく、取分け函館書芸社等夕陽会の多くの先生方や皆様の支えと後押しのお陰げと深く感謝申し上げます。

昭和三十五年二類を修了し、夕張市に赴任し二校十六年松前町六年、函館市三校十六年で平成十年、定年退職をしました。

退職後、竹浪翠堂氏の刻字教室開設を知り参加したのが、刻字との出会いでした。

刻字とは、自書・自刻の書道の一分野で、板に自分の書を貼り、文字を彫り出してそれに着色し、仕上げる物です。ですから、書く楽しみ・彫り上げる楽しみ・着色する楽しみを一度に味わう事の出来るものといえます。初めのうちは「ノミ」を握り木槌で叩き、文字彫りだすことに夢中でしたが、ノミの切れ味が作品を左右することになり、砥石と刃物の格闘が始まり、着色では色だけではなく箔の仕上げにも技術は求められて苦闘するという具合に、一歩進むごとに新しい課題が次々に襲ってきます。でも、それらの難題を僅かでも乗り越えられたときの喜びが、「学ぶ意欲のある内は、青春だ。」と、無我夢中にさせられてきたように思います。ただ楽しいだけではなく少しは書に対する気迫の感じられる作品づくりに努め、ボケ防止に続けていけたらと思っています。

夕陽会の皆様の益々のご多幸をお祈りして、感謝とお礼のご挨拶とします。有難うございました。

出会いに感謝

五十嵐　和幸（昭和五十二年卒）

この度、はからずも函館市立学校教職員表彰の栄を賜りました。これも、これまでに出会い、様々な面でご指導をいただいた多くの皆様方のご支援、ご厚情のお陰であると、衷心より感謝を申し上げます。

顧みますと、三十七年前、函館駅を朝五時に出発して汽車を乗り継ぎ、半日かけて到着した網走管内滝上町の滝上小学校が教員生活のスタートでした。もちろん初めての土地で、回りに知り合いは一人もおらず、不安と寂しさが募る毎日でした。そんな中、町内に七校あった小・中学校の中にたった一人だけ夕陽の先輩がいらっしゃいました。山の小さな複式校の校長だったその先生は何かと機会を見つけては声を掛けてくださり、教員の心構えや子どもとの接し方、教科指導のヒントから、町のこと、生活にかかわることまで親身になって教えてくださいました。先輩のありがたさを身にしみて感じたことが思い出され、今でも感謝の気持ちが湧きあがってきます。

その後道南に戻りましたが、函館市立の学校には教諭時代に一校、校長時代に二校で計九年だけの勤務でした。それでもその中で、理科や道徳などのサークル活動を通じて専門的な研修を深めることができたことや、夕陽の先輩・後輩をはじめ多くの皆様との絆を強めることができたことは、生涯の宝となっています。

学校現場を離れてすぐ、昨年四月から縁あって、幼児教育にかかわっています。三歳児から五歳児までの多様な個性と可能性をもった園児百七十名に囲まれ、願ってもない第二の人生を送らせていただいています。微力ではありますが函館の未来を担う心豊かな子を育て、小学校への基礎を培うことがこれまでのご恩返しと考え、毎日を楽しくがんばっております。今後とも宜しくご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

同窓の絆の強さ

笠井雅秋（昭和五十三年卒）

この度、函館市立学校教職員表彰受賞の栄誉を賜り、身に余る光栄と恐縮しております。同時に、これまで支えていただいた諸先輩や同僚、保護者や地域の皆様、それになんと言っても平素よりご助言やご指導をいただいた教育関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

昭和五十三年三月に母校を卒業して、喜茂別町立鈴川小学校を初任として後志管内に二校六年間経験させていただきました。この間、夕陽会後志支部の諸先輩からのご厚情とご指導に接し、ひじょうに心強く感じていたものです。特に渡島に戻る時のご助言やご指導は、今でも忘れられません。深く感謝しております。

昭和五十九年から渡島支部に六年間、平成二年から函館市支部に十七年間、そして、校長に採用されてまたまた渡島支部に五年間、最後は函館市支部二年間と大変お世話になりました。同窓としての絆をひしひしと感じ、温かく包まれながら職務に専念できたからこそこの賞をいただけたと言っても過言ではありません。

私にとって、最後に函館で退職を迎えたことを喜んでおります。教職人生三十六年間ということで、あと二年残っていたのですが、家族の介護を選択し、悔いは少々ありましたが、早期退職を決意しました。全介助の状態であるため、表彰式には同伴で参加できましたが、祝賀会という夜の部は参加不可能になってしまいました。祝って頂く立場なのに大変申し訳なく恐縮しております。

今後は、私自身の健康に留意しながら、がんばって介護生活を送っていく所存です。

退職までの皆様のご厚情に感謝し、今後の夕陽会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

誠にありがとうございました。

多くの出会いに感謝

黒丸譲二（昭和五十一年卒）

この度、函館市立学校教職員表彰受賞の栄を得ました。これも諸先輩や同僚・後輩はもとより保護者や子どもたち、地域の方々、教育関係者等々多くの皆様方のお力添えやご厚情によるものであり、心より深くお礼と感謝を申し上げます。

昭和五十一年、教員に採用され、すでに閉校となった檜山郡厚沢部町立清水小中学校に赴任。函館からバスで厚沢部町へ、市街地から学校まではバスが途中までしか行っておらず、我虫タクシーで。最後のバス停滝野を過ぎると舗装が切れ、細い山道を行くこと数十分、突然一軒の家が、そして平屋作りの木造校舎が。僻地三級、小中併置校、三・四年複式学級の担任、さらには中学校の教科も教えることに、これが教員生活のスタートでした。心細い気持ちになっていましたが、勤務校や近隣校の夕陽の諸先輩からのご指導やご助言をいただき、同窓の温かい気持ちをうれしく感じ、教師としての道に無事に踏み出すことができました。今でもその時のことを懐かしく思い出します。

その後、函館に転任し、退職までの九校、三十五年間お世話になりました。その間勤務校をはじめ、研究会等を通して多くの方々との出会いがあり、教師として大いに鍛え、育てていただきました。

今後は、夕陽会同窓生としての自覚を胸に、お世話になった函館市の教育の充実のため微力ではありますが、力を尽くしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

結びに、夕陽会会員の皆様のご健勝・ご活躍と夕陽会のますますのご発展をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

皆様に感謝の思い

鈴木利治（昭和五十一年卒）

このたび、函館市立学校教職員表彰受賞の栄を得ました。これも諸先輩や同僚・後輩はもとより保護者や教え子たち、地域の方々、教育関係者等々多くの皆様方のお力添えやご厚情によるものであり、心より御礼と感謝を申し上げます。

昭和五十一年四月、函館市立五稜中学校が教員生活のスタートでした。当時は、十八学級（内特三）、生徒数六百名位の中規模校で五年間勤務しました。右も左も分からない中、教育とは？学級指導とは？教科指導とは？生徒指導とは？等々教員としての根っこを昼夜問わず育てていただきました。その時は、ほとんどの先生方が夕陽会員であり、私は夕陽会を意識せず過ごしました。その後、椴法華・旭岡・戸倉・大沼・大野・港・湯川・尾札部・桔梗中学校に勤務し、地域活動等では、特にＯＢの方にお世話になり夕陽会の絆を強く感じたものでした。

現在は、公立はこだて未来大学の非常勤講師として、「余暇と健康Ⅱ」の講座を二コマ（火・木）担当しながら、函館児童相談所の保護指導員として月に六回程度の勤務をしております。また、昨年十月は臼尻中学校、十一月は凌雲中学校、十二月～二月は桔梗中学校で柔道等授業支援事業外部指導者として授業のお手伝いをさせていただいておりました。退職直前に、体調を崩した私にとって適度な勤務状態でしたが、外部指導者の仕事が始まってからは少しハードかなと感じました。昨年九月、札幌で行われた柔道昇段の審査会で八十六歳の面接官に「あと十年は指導できるので頑張りなさい。」という激励のことばをいただきました。体が動く限り子どもたちのため自分の健康のためにも頑張りたいと思います。

最後になりましたが、夕陽会のご発展、会員の皆様のご健康とご活躍を心からご祈念申し上げます。

出会いと感謝

中谷　満（昭和五十二年卒）

この度、函館市立学校教職員表彰受賞の栄を賜り、身に余る光栄に存じます。これも多くの諸先輩や同僚・後輩の教職関係の皆様、保護者・地域の方々の支えやご厚情によるものと心より感謝申し上げます。

教員としての第一歩は、天塩町立啓徳小中学校です。何も分からず赴任した私でしたが、温かく迎えてくださった職場の皆さんや地域住民のまなざしに接し、微力ではあるが、目の前の子どもたちの成長に全力を尽くそうと決意したことを今でも鮮明に覚えています。

ここでの五年間で、教員としての「構え」を学ばせていただいたことがその後の教員生活の基礎となり、迷ったときはそこに戻り、何とか乗り越えることが出来たと思っております。

二校目からは、「新卒」という言葉は取れ、周りからは一人前としての扱い。次から次と仕事が回ってきます。能力不足で穴だらけの行事計画案を職員会議に提出することもありました。その通りに実施すると支障が出るのですが、その穴を周りの同僚が埋めながら生徒に説明してくださり事なきを得たこともありました。このように支えてくださる先輩や同僚が必ず現れ数多く助けられました。このことは、どの職場でも経験しました。紙面を借りてお礼申し上げます。

管理職時代は、学校の環境整備、バザー等でＰＴＡ・町会の役員の皆様には多大なるご支援をいただきました。どの勤務校でも、役員の方の人脈の広さや実行力には圧倒されると同時に、学校は地域に支えられているという思いを実感した日々でした。

夕陽会の皆様には、三十七年間の教員生活でその時々で貴重なるご助言に感謝申し上げますとともに、会のますますの発展をご祈念いたします。

平成26年度
夕陽会函館市支部受賞祝賀会ならびに会員懇親会

平成27年２月20日（金）　於ロワジールホテル函館

力強い指揮

〈学校関係の皆さん〉　未来の夕陽を担う若人たち　〈市職員の皆さん〉

ご祝辞　指導監　竹林　亨　様

ご祝辞　副市長　中林　重雄　様

受賞者の皆様

乾杯　夕陽会会長　橋田　恭一　様

祝杯　教育長　山本　真也　様

寮歌先導　小林　周次　様

学校・職場紹介

函館市立南本通小学校

本校は、昭和五十八年四月、日吉が丘小学校・本通小学校・深堀小学校より二年生以上の移送児童五百六十九名と新一年生百六名の計六百八十五名で開校し、今年度で三十二年目を迎えました。周囲は宅地化が進み、成熟した住宅地になるとともに少子化の傾向となってきました。多い年には七百名を越える児童が在籍していましたが、今年度は二百二十五名の児童が地域の方々に見守られながら学んでいます。

校舎は、特別史跡五稜郭の北東に位置し、この辺りはかつて水田や湿地帯であったために、砂利などを敷き詰めて建てられました。そのため、周囲に花を植えることはできなかったため、平成元年から花壇の整備に力を入れるようになりました。その成果として、花壇コンクールでは、最優秀賞を受賞したこともあります。その後、花壇は縮小されてしまいましたが、かわいらしく咲く花は児童や地域の方々の心の潤いになっています。

児童は意欲的に授業に取り組み、互いに協力し合いながら学習活動を行っています。さらに基礎基本を中心とした「確かな学力」を身につけさせることや、コミュニケーション能力を培うことを重点とした実践により、児童は「生きる力」としての能力が向上してきています。

生活面では、明るく素直でがんばる児童が多いので、さらに主体性・自主性・持続力・忍耐力の育成に向け、継続した指導をしています。また、元気で明るいあいさつ、優しい心や思いやりの心を表すあいさつの定着を図るため『あいさつ運動』に力を入れて取り組んでいます。加えて平成二十年度より『ボランティア協力校』の指定を受け、ノーマリー教室をはじめ思いやりの心を育む教育活動を行っています。文化的活動にも力を入れ、合唱団が地域で歌声を披露したり、絵画コンクールでは、学校として『文部科学大臣表彰』を受けたりするなど、成果が表れています。今後も地域・保護者との連携を深め、児童の笑顔が溢れる豊かな教育活動をいっそう推進していきます。

■会員紹介

校長　井上一男（昭和五十六年卒）
教頭　田湯義浩（昭和六十二年卒）
教諭　町畠彰（昭和五十四年卒）
白戸礼美子（昭和五十五年卒）
岡本尚志（昭和五十六年卒）
野口久子（昭和五十六年卒）
土田千春（昭和五十八年卒）
武内貴宏（平成三年卒）
山岸一徳（平成十年卒）

函館市立潮見中学校

本校は、函館山山麓に位置し、函館の名所旧跡、街並み、豊かな自然に囲まれた素晴らしい環境の中に、昭和二十三年函館市立青柳中学校として、十四学級六百四十四名の生徒で、新制中学校として開校しました。その後、昭和二十五年に校舎を谷地頭町の元北海道第二師範学校予科校舎に移転し、校名を谷地頭中学校と改称し、立待岬近くに位置した初めての独立校舎での教育活動が始まります。昭和二十六年には十六学級とは別に特殊学級を編成し、昭和三十年、現在の位置に校名を函館市立潮見中学校と改称し良き校風と伝統を培ってきました。平成六年に現在の校舎となるまで親しまれていた木造の前校舎は、北洋漁業の再開を祝して開催された「北洋博覧会」の会場としても使用されました。「輝く太陽のように、明るく生活する子どもの育成」を教育目標に掲げ、心の太陽を象徴した校章を制定し、「潮見の教育」の第一歩を踏み出したのです。

校区である函館山山麓の西部地区は、開港当時からの街であり、幕末・明治の名残をとどめる名所旧跡も多く、歴史的たたずまいがあります。また、老舗も多く、往時の名残が引き継がれ大変落ち着いた雰囲気であり、家系は二代目・三代目と変わりつつあります。

保護者には本校卒業生も多く、母校を愛する気持ちはとても強くて学校に大きな期待をかけ、応援してくださいます。

教育目標である「知性豊かで、自ら学び創造する生徒」「自他を重んじ、礼儀正しく行動する生徒」「心身共に健康で、ねばり強く努力する生徒」のもと、生徒一人一人の学ぶ喜びや意欲を育み、「学習内容の確実な定着」「思考力・判断力・表現力の向上」を目指しています。具体的には、①放課後や昼休みに補充学習を実施した「わかるまでやり切る」指導の徹底、②小学校と連携して定期テスト前二週間を「家庭学習・生活習慣の改善強調週間」としたチェックシートを活用した取組、③定期テスト二週間前を「携帯・スマホ・ゲーム機利用制限週間」とした家庭学習・生活習慣の改善などに全教職員一丸となって取り組んでいます。

■会員紹介

教頭　仲井靖典（昭和六十一年卒）
教諭　佐々木優（昭和五十五年卒）
高橋美智子（平成六年卒）
中山央（平成十二年卒）
猪股正貴（平成二十五年卒）

◎訃報

ご冥福をお祈りいたします

・川島　光夫氏（昭30年卒）平25年3月ご逝去
・笹原　龍生氏（昭29年卒）平26年2月ご逝去
・高屋　泰男氏（昭31年卒）　2月ご逝去
・石川　昭二氏（昭23年卒）　3月ご逝去
・町田昭之助氏（昭28年卒）　4月ご逝去
・眞野　道良氏（昭20年卒）　4月ご逝去
・阿部　徹氏（昭32年卒）　6月ご逝去
・小澤　毅氏（昭37年卒）　6月ご逝去
・丹野　俊次氏（昭32年卒）　6月ご逝去
・中貝　幸男氏（昭34年卒）　8月ご逝去
・青木　信二氏（昭27年卒）　8月ご逝去
・菅野　喬夫氏（昭28年卒）　8月ご逝去
・丹代　壮氏（昭22年卒）　9月ご逝去
・佐藤　令次氏（昭31年卒）　10月ご逝去
・竹原　二哉氏（昭27年卒）　10月ご逝去
・遊佐　悦大氏（昭29年卒）　11月ご逝去
・名東トシ子氏（昭24年卒）　11月ご逝去
・真崎不二彦氏（昭28年卒）平27年1月ご逝去
・安達　益克氏（平5年卒）　1月ご逝去
・奥谷　雅雄氏（昭20年卒）　1月ご逝去

平成二十六年度 函館市支部前納会員（五十音順）

・青木　昌史　氏（昭和53年卒）
・五十嵐　和幸　氏（昭和52年卒）
・黒丸　譲二　氏（昭和51年卒）
・品田　晃宏　氏（昭和51年卒）
・杉崎　良治　氏（昭和51年卒）
・鈴木　貴子　氏（昭和51年卒）
・鈴木　利治　氏（昭和51年卒）
・田邉　信之　氏（昭和51年卒）
・千田　重幸　氏（昭和53年卒）
・冨樫　廣幸　氏（昭和51年卒）
・中谷　満　氏（昭和52年卒）
・堀川　美名子　氏（昭和54年卒）
・横山　節郎　氏（昭和53年卒）

平成二十六年度 夕陽会函館市支部 会務報告

夕陽会函館市支部事務局

平成26年

4月
○新年度会員名簿作成
12日(日)・支部総会
○函館市支部管理職名簿作成
○支部別会員名簿提出
10日(土)・夕陽会渡島支部大懇親会・新会員歓迎会へ三島支部長参加
15日(木)・**函館市支部新会員、転入会員・幹事懇親会（ホテル法華クラブ）**

5月
○会費徴収
○本部総会・懇親会推進業務（本部との打合せ　しおり作成等）
6日(金)・第3回夕陽会本部役員会に支部長・幹事長出席
7日(土)・函館校創立100周年記念講演会・式典・祝賀会に支部長・幹事長出席
13日(金)・第4回本部役員会　顧問・参与会に支部長・幹事長出席
21日(土)・夕陽会全国支部長会議・夕陽会総会に支部長・幹事長参加
・**本部総会・懇親会（函館国際ホテル）**
30日(月)・管理職採用・昇任者に寄付依頼
○夕陽「明日の教師塾」案内発送

7月
10日(木)・本部会報213号移送
○道通に暑中見舞広告を掲載（三支部）
23日(土)・鶴陵会渡島支部懇親会に風間副支部長参加

8月
○管理職採用・昇任者に寄付集金

9月
18日(木)・**支部会報86号発行**
1日(水)・第2回本部役員会　支部長幹事長出席
○道通に教育の日広告を掲載（三支部）

10月

11月
12日(金)・祝賀会・会員懇親会案内状発送
・本部会報214号移送
○受賞祝賀会準備
○道通に年賀広告を掲載（三支部）
21日(水)・顧問会議案内状発送
30日(金)・函館校創立100周年記念美術・書道展オープニングセレモニーに支部長参加

12月

平成27年

1月
5日(木)・支部顧問会議
12日(木)・支部役員会
14日(土)・夕陽会渡島支部勇退者激励感謝の会に支部長出席
16日(月)・**函館市縄文文化交流センターに子供用ライフジャケット10着寄贈**

2月

20日(金)・**支部受賞祝賀会・会員懇親会　357名参加（ロワジールホテル）**
23日(月)・本部役員会に支部長、幹事長出席
○新年度会員名簿作成依頼
○栄進者への祝意
○会計監査
○退職会員の前納会員移行案内
○総会（4／11）の準備
16日(月)・**支部会報87号発行**、本部会報215号移送

3月

【平成二十七年度　予告】

◇函館市支部総会

・日　時　四月十一日（土）
　午前十時～
・会　場　市民会館大会議室

①学校幹事は必ず出席してください。（都合の悪い場合は代理出席も可）
②学校幹事の他に次の会員数の出席をお願いいたします。
◇会員数九名以下の学校は、一名以上
◇会員数十名以上の学校は、二名以上
③初任者・新卒者及び市外から転入された教職員の方は、ご紹介いたしますので必ずご参加ください。

◇夕陽会本部総会・大懇親会

・期　日　六月二十日（土）
・会　場　函館国際ホテル
・本部総会　午後四時〇〇分～
・大懇親会　午後五時三十分～

事務局だより

・支部会報第八十七号をお届けいたします。本会報の発行に際し、ご多忙な時期にもかかわらず、快く原稿をお寄せいただき誠にありがとうございました。紙面をお借りして、心より感謝申し上げます。
・前納会員制度のご案内を、三月でご退職される会員の皆様に差し上げております。便利なこの制度のご利用をお勧めいたします。

（夕陽会函館市支部幹事長　髙間　猛）

題字／大塚 信夫 氏（昭和50年卒）